

## 13 小牧・長久手の戦い

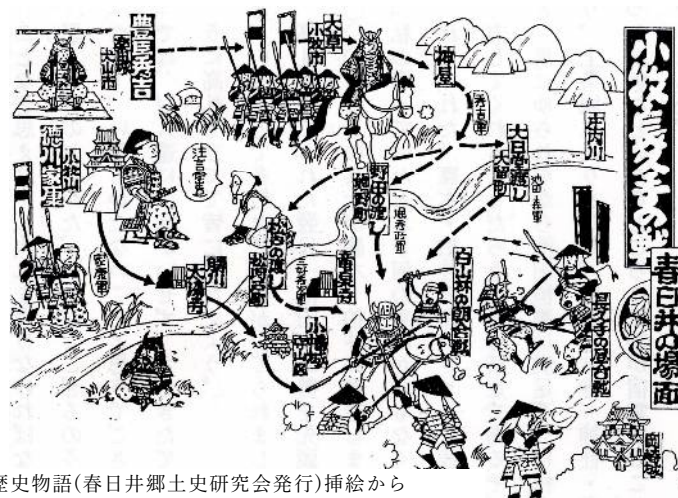
戦国時代、里人は田畑を荒らされ、人足として駆り出されたりと、苦しめられたことでしょう。

戦国の時代も終盤になる天正12年(1584)の小牧・長久手の戦いでは、この辺りは戦場となり、里人も大きな犠牲となりました。

この戦いの歴史的意義は大きく、天下取りのターニングポイントは、「大坂の陣」ではなく、「関ヶ原」でもなく、「小牧・長久手の戦い」とも言われているこの戦いに、この地域の人達はどのように向き合い関ったのでしょうか。

その時の里人たちの様子を伝える伝承も多く残っています。

- (1) 戦いと住民 ..... p320
- (2) 春日井の刀狩 ..... p324
- (3) 戦いの様子(時系列表) ..... p326



絵 春日井の歴史物語(春日井郷土史研究会発行)挿絵から

### 小牧・長久手の戦いとは

賤ヶ岳しずがたけの戦いの翌年天正12年3月、信長の二男・信雄は、徳川家康と結んで小牧山に陣を張り、対する秀吉は楽田に布陣した。

秀吉の兵8万、家康側はその半数。小競り合いが続く中、功をあげた池田恒興らが、家康軍の背後の岡崎城を2万で密かに攻撃しようとする。

4月7日、それを知った家康は、1万4千を率いて小牧を出発。長久手にて9日早朝より数度にわたり西軍を横撃し、ついに壊走させた。

その後、決戦の機会がないまま、秀吉は信雄との単独講和を成立させた。

松河戸文化科学探求隊

隊長 長谷川浩

080-3657-7052

松河戸町の沿革ホームページ

<http://matsukawado.com/>

## (1) 戦いと住民

この尾張地域は、戦国時代、斯波<sup>しば</sup>氏の守護代織田氏が実力を持つようになり、やがて信長が支配するも、天正10年(1582)本能寺の変が発生し、信長・信忠親子は揃って敗死します。

山崎の戦いで明智光秀を倒し実力を持った秀吉は、天正11年(1583)賤ヶ岳<sup>しずがたけ</sup>の戦いで柴田勝家を破り、信長の次男信雄・家康との関係も悪化し、天正12年(1584)小牧・長久手の戦いが始まることになりました。

この戦いの歴史的意義は大きく、天下取りのターニングポイントは、「大坂の陣」ではなく、「関ヶ原」でもなく、「小牧・長久手の戦い」とも言われています。

(頼山陽(らいさんよう)の日本外史)

小牧と長久手の間にある松河戸の辺りも戦場となり、里人も大きな犠牲となりました。

また、その時のこの辺りの村人たちの様子を伝える伝承も多く残っています。

小牧方面での戦いの時に、家康(東軍)が「田楽砦」を突貫工事で築く時、篠木・柏井の村人たち2千人が動員されたといえます。

田楽砦を守備したのは、秀吉方の池田恒興によって攻め落とされた犬山城の残党で、彼らは犬山城落城後、砦となる長江家屋敷近くの伊多波刀神社(上田楽町)に集結していたところ、徳川家康自身が出向いて説得したとのこと。

膠着状態を脱するため、西軍の池田恒興ら2万は、岡崎城を攻めるため、春日井の尾張丘陵から大草、関田を経て上条城へ向かいました。

上条城主小坂孫九郎雄吉の留守(織田信雄の家臣であったので長島へ出陣していました)を守る大留城主の村瀬作左衛門、吉田の前野新蔵、上条の森川権六郎ら、篠木・柏井衆は思案にくれましたが、結局合戦におよんでも勝ち目はないと判断し、西軍を受け入れることとなりました。



信雄・家康連合軍の連砦の東端に位置する。池田恒興の犬山城攻略により、城を落ち延びた犬山城の残党が田楽の伊多波刀神社に集まっていたものを、家康が自ら出向いて長江平左衛門の屋敷に集め、砦を造り守らせたのが田楽砦の始まりとされている。

昭和三十年代までは土塁の一部がL字型に残っていたが、その後の開発により消滅した。



田楽砦跡 撮影平成28年 (長福寺の東隣り)

「春日井の歴史物語」に、その時の里人の協議の苦悩の様子(想定)が書かれていましたので紹介します。

- ・「我々総勢をあわせても、秀吉方はその何十倍もの人数で到底戦うことは無茶でござる」
- ・「田畑を踏み荒らされ、作物が取れなくなれば、村の人々はなんぎとなる。何とかこの難をのがれる手はないものか」
- ・「我等は先代より織田家に恩義がござる。殿さま(小坂孫九郎雄吉)も信勝様の家臣で戦いに出られて留守だしろう」
- ・「秀吉様も若いころ、<sup>すのまた</sup>墨俣城築城(墨俣の一夜城)の時は、我等も力をお貸ししたこともあったのになあ」
- ・「池田様の書状には味方になれば、勝ったときほうびを与えるとある」
- ・「敵に回れということじゃな。私の子等は、殿と一緒に出陣しているのでござるよう」
- ・「申し入れを受けなければこの城など簡単につぶされてしまう。村々のことを思えば申し入れをうけなければならぬと思うがおのおのがた、いかがでござるのう」
- ・「ウーン、いたしかたないことと思う」

この戦以前の桶狭間の合戦や墨俣築城などにおいても、柏井衆は、大きく関わっています。

一部を紹介します。

#### 【清州攻めと柏井衆】

天文 23 年(1554)清州城主織田信弘(信長の叔父)が、家老の坂井大善たちの謀りごとによって殺害された。信長から急知を受けた吉田城主小坂久蔵正氏など柏井衆は真っ先に清州上城へ向かいました。清州城の酒井らの軍勢は、これを迎え撃つため田園地帯で陣をはっていたので、柏井・上条の軍は、田を荒らすことに気遣い、攻めるのを思案している矢先、清州勢の不意の襲撃に小坂久蔵正氏は討死しました。

#### 【稲部合戦】

弘治 2 年(1556)織田信長の弟、信行・末盛方が謀反をおこしました。

信行方の武将林美作は庄内川を越え、篠木・柏井に侵入して家々に火をつけるなど乱暴狼藉をはたらきました。この時、村瀬作左衛門は大留城から吉田城に入り、孫九郎とともに吉田城・上条城の砦をたてこもり、この地をまもりました。

その後、信長の命により、吉田城から名塚の砦へ、さらに稲生に進出し、末盛方と合戦になり、ついに信長方が勝利を治めています。

#### 【桶狭間の合戦と柏井衆】

信長の生涯においても最も重要な戦であった、永禄 3 年(1560) 5 月の桶狭間の合戦においての、孫九郎等柏井衆の戦の状況が“前野文書”に書かれており、信長から要請で参戦しています。

……孫九郎尉柏井衆に伝えけるは、辰の上刻までには街道筋まで駆け付けられよ……、

#### 【墨俣築城と柏井衆】

永禄 9 年(1566)、信長が京へのぼり天下布武を計ろうと、美濃の稲葉山城を攻略したおり、木下藤吉郎は土地の土豪等や盟友の蜂須賀小六、そして孫九郎、村瀬作左衛門率いる篠木、柏井衆等による土豪地侍編成の軍団の働きで、墨俣築城を成し遂げています。“

上条城へ西軍を受け入れる時の里人の気持ちは複雑であったことでしょう。

柏井衆としては、信長公以来の織田家とのつながりからすれば、主筋は信雄・家康方にあり、心情的にも織田・徳川方であったと思われまます。

結局のところ、西軍は4月7日上条城に入り、上条城の周辺に2泊宿営しました。

以前犬山城主(1570~1581)でもあった池田恒興は、柏井衆約4千余の調達をも目的にしていたが、柏井衆の相談がなかなかまとまらず、ついに大留城主の村瀬作左衛門が案内役を引き受けることで決まり、8日亥の刻(午後10時)に全軍を3縦隊に分け3箇所(野田、大留、大日)の庄内川の渡しを渡り、志段味から岡崎城へ向けて進軍していきました。

第一隊 - 池田恒興	- 兵 6,000 人	大日、大留の渡し
第二隊 - 森長可	- 兵 3,000 人	大日、大留の渡し
第三隊 - 堀秀政	- 兵 3,000 人	野田の渡し
第四隊 - 羽柴(三好)秀次	- 兵 8,000 人	松河戸の渡し

この様な西軍の岡崎攻めの動きを察知した家康・信雄の連合軍は、4月8日夜に小牧山を出陣し、小針、豊場を通り9日早朝に勝川に着陣しました。案内役は如意村の石黒善九郎が務めていました。

そして「勝川の渡し」を渡り約9,300余の連合隊は小幡城に入り、これより長久手の合戦に向かいました。

この時、西軍の動きを家康に報告したのは篠木・柏井衆だとも言われています。

この迅速な動きが、この後の長久手の戦いで東軍に大きな勝利をもたらすこととなります。

家康が小幡城へ向かう途中、勝川の龍源寺(太清寺、勝川町2)で小休止していますが、勝川の渡しを渡るとき「この村はなんというか」と郷士の長谷川甚助に聞いた時、「庄内川は浅瀬になっており、みな徒歩で川をわたるので”かち川(徒歩川)”と呼んでいる」と答えると、家康は上機嫌になって「なんとも縁起がいい名じゃな」「よし、これからは戦いに勝つという”勝川”と呼ぶがよかろう」と、その後「勝川」になったとのエピソードも伝えられています。(勝川という名は以前から記載あり)



家康が行軍中に小休止した太清寺

#### 兜塚と勝川具足

家康が休んだところは、阿弥陀堂(今の十王堂)前で、その東の兜の形をした塚を「兜塚」というようになりました。

家康がこの時つけた兜の前面には、びんとのびたシダの葉が付けられていました。

のちに、この鎧兜は「勝川具足」とよばれ、大事な戦いに勝った縁起のよい道具として尊ばれました。

徳川家で一番大切な兜として、三代将軍家光が久能山東照宮から江戸城へ移し、毎年1月11日の具足開きには、江戸城の一番格の高い部屋に飾り、大名たちを集めて武運長久をいのりました。

4月9日の「長久手の戦い」で不意を突かれた西軍の池田恒興、森長可が討死し、合戦は徳川軍の勝利に終わり、案内役であった大留城主の村瀬作左衛門も戦死しました。

また、勝川、下津、松河戸、野田の渡しは、西軍方の立てこもった松洞山(龍泉寺城)に襲撃する徳川方の渡河で大激戦となった古戦場で、戦死者を埋葬した塚からは、錆びた甲冑や刀剣と思われるものが発掘されました。

松河戸の観音寺の草創開山雲山存道和尚は、多数の戦死者を集めて厚く葬った高法の僧でありました。

首塚は、「尾張名所図会」の「色嶺」の頁でも安昌寺に通じる路傍にはっきりと描かれています。

※ 雲山存道和尚は、長久手村岩作の安昌寺の開山でもありました。



長久手の戦いの戦死者を埋葬供養した首塚  
長久手市岩作元門41番地  
碑は明治43年に地元有志によって立てられた。

当時の砦の跡として、上条町2丁目にある上条城跡、下条町3丁目にある吉田城跡が知られています。

吉田城跡からは大きな礎石が発掘されており、一つが小野小学校の忠魂碑の台石となっていました。

秀吉は不利な戦局のため、長久手方面に向かうことができなく、龍泉寺城から庄内川を渡り、春日井地域を経て、楽田に退去しました。

その際、篠木・柏井辺りで一揆が起こり秀吉方の軍勢は一揆に攻められ、しんがりを務める堀尾勢に、篠木、柏井衆が鉄砲で後追いをしたといわれます。(太閤記)

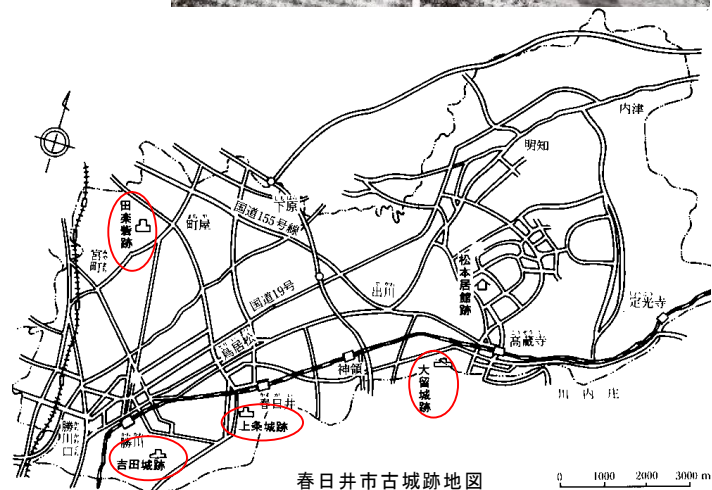


←下条にある吉田城跡

↓小野小学校にある基礎石

なお、秀吉は作戦の立て直しのため美濃に退く途中、4月29日に清州城の西北にある加賀野井城を攻めますが、5月6日加賀野井城は開場して、この城を守っていた上条城主小坂孫九郎雄吉は逃げ延びることとなりました。

その後、秀吉、信雄の家康ぬきの単独和議が行われたその中で、上条城、吉田城は取り壊しの運命となりました。



春日井市古城跡地図

0 1000 2000 3000 m

小坂孫九郎雄吉は前野村に屋敷を移し住むこととなりました。

小牧・長久手の戦いを通じて、秀吉は春日井地域で最も危険に陥っており、このような状況から、いかに柏井衆を恐れていたかが分かります。

#### 関係地元人物

村瀬作左衛門 …… **大留城主**で長久手の戦いで秀吉方の池田恒興軍に参加し道案内をしたが敗れて討死した。

小坂孫四郎吉政 …… 明応4年(1495)奉行所として**吉田城**を築く。

小坂久蔵正氏 …… 小坂孫四郎吉政の子孫で**吉田城主** 清州攻めで戦死する。

小坂孫九郎光善 …… 建保6年(1218)**上条城**を築く。

林重之 …… 小坂孫九郎光善の子孫で名字を小坂から林に改姓した。上条用水を開く。

林盛重 …… 上条城の領地を信長に返上し帰農する。

林重登 …… 長久手の戦い時秀吉方の道案内をする。その後、秀吉は林氏をこの地区の総代名主にした。

小坂孫九郎雄吉 …… **前野孫九郎**(小坂久蔵正氏の妹の子で吉田城で育つ)、織田信長は清攻めで小坂久蔵正氏が戦死し城主がいなくなった吉田城を前野孫九郎に継がせ**小坂孫九郎宗吉**を名乗らせる。

吉田城と上条城の城主となり(1558)、織田信雄から雄の字をもらい**小坂孫九郎雄吉**となる(1569)豪勇で、最後まで織田信雄に従う。

## (2) 春日井の刀狩

秀吉が3ヶ条に亘る「刀狩令」を発したのは、天正16年(1588)7月8日で、「小牧・長久手の戦い」後4年になります。

「諸国百姓が、刀わきざし、弓鏑(やり)、鉄砲その他の武具を所持することを停止する。持っているで一揆を企んだりして悪い事をするから取りあげるが、これで今度造る大仏殿につかう釘やかすがいを作るのだ。」とっている。



刀狩の高札

この兵農分離の号令は、百姓にとっては戦いの場に出ることなく、平和に農に生き、来世まで助かる有難い措置というふれこみでした。

「刀狩令」とは、農民から刀・槍・鉄砲などの武器を没収する法令のことで、大仏の鑄造を口実に農民から武器を徴収しました。

「刀狩令」の目的は兵農分離をおこなうことで、当時は、農民の武装は当たり前で地侍と呼ばれていました。

しかし、豊臣秀吉は過去の経験から農民が武器を持っていることに危機感を持っていました。

それは、「小牧・長久手の戦い」の天正12年4月10日、秀吉は不利な戦局のため庄内川を渡り上条から楽田に撤退するとき、篠木・柏井辺りで一揆が起こり、秀吉方の軍勢は一揆に攻められ、しんがりを務める堀尾勢に篠木、柏井衆が鉄砲で後追いをしたといえます。

尾張では、織田信雄に司令されると、奉行に家老の滝川三郎兵衛雄利を任じ、清須から各給人へ「御触書」を出しました。

この天正戊子年触書の内容を略記すると次のようです。

郷土史かすがい第34号から

一、このたび百姓に武器を差出すよう通達がきました。これは大変嚴重な達しですからよろしく願いたい。但し、給人、奉公人、軍役の雑人は別です。百姓から急に武器をとりあげると危険なこともありますので、道中安全のために短刀1腰、但し1尺以内のものは対象外とします。

一、この触れを在々村々辻々に高札をたてて、1字たりとも違わないように伝達してください。

一、差出し方法だが、さやの有る物はさやにおさめ、さやのないものは油紙で丁寧に包み村々でとりまとめて給人に差し出し、給人が集めること。

一、9月1日厳守で、清須の御馬場先で集めるので、持ってきたら、奉行に届けて下さい。届け方は、一、刀何口(ふり)、一、脇差何口、一、鏑何筋、一、鉄ぼう何挺、というように墨で書き、奉行の了承済という書きつけをもらって各給人毎に自分の名を書いて差し出すこと。というものでした。

当時、春日井の中部より西部にかけては、約300挺、中部より東部地域は250挺の鉄砲をもつ百姓衆があり、彼等は柏井衆八家といわれる地侍の頭分に統率され、橋本一巴流の鉄砲集団を構成し団

結も強く、織田信秀の頃から加勢を申し付けられると、いち早く馳参じ忠節を尽してきた輩でした。特に、信長は彼等を可愛がり下の判物を与えていました。

領地内於而 百姓衆鉄砲玉薬等召置其上者可手入肝要候  
然上者於分国 鹿鳥打取事不苦候 委細佐々可申者也 依状如件  
永禄(成政)八年八月廿三日 信長 花押

この判物を楯にとって刀狩令に不服を唱え断固として鉄砲を提出することをこばむ地侍らは滝川三郎兵衛に対し、惣頭衆の梶川権六、加藤平三を代表者とし強力な交渉をおこなっています。

滝川はこれに対し「お前たちが永禄乙丑の判物を持ち、三十年来忠誠の志をもつ事は私もよく知っている。

しかしこのたびの触れは私も仕置きに当惑しているのだ。

まして当家は、信長様のお血筋でもあり、御台を守ってきたその方らの気持ちも尊い。

だからとて天下の法は曲げられず、隠しておいた場合、万一露頭の折、御主君に如何なる迷惑が及ぶかはかり知れないのを私はおそれている。

しかも、去る天正甲申（12年）の三州中入りの折り（小牧・長久手の戦）、お前たちの鉄砲隊は秀吉を竜泉寺下へ追尾したり、秀吉の引上げの折、殿軍をつとめた堀尾茂助の軍に攻めかかったりして悩ましたので、秀吉もその側近の者も多く鉄砲のあることをよく承知しており、うそが云えないのだ。」という。

それでもねばり強く折衝するうち滝川も彼等の言い分である「鉄砲を差し出してしまうと鳥獣が子をふやし作物を荒らす。」というのを生かし、信雄と協議して次の如く回答しました。

「お前たちの住む柏井、篠木の方は山間で鹿も兎も多いので、鉄砲をとりあげられてはさぞ困るだろう。五、六十挺ぐらいなら給人の土蔵に留置し、作物を荒らす鳥獣をうつだけに使うにおいてはお咎めはないだろう。」

かくて、一部の鉄砲は差し出しを免れました。

#### 御定書

一、御制禁鉄砲儀 殊無足者 如従前令免許事  
一、 向後不法振舞於有之者 直令停止之事  
一、 限鳥鹿打之事 自霜月至明年四月迄其外一切使用不可有事  
右者、当家依為有縁 鳥鹿打之儀  
在郷無足之本人子孫之者令免許者也 若右条々違乱之輩者 速処厳科者也  
八月三日 信雄 花押

こうして、差し出された武具刀剣の類は総て清須城大手門前に集められました。

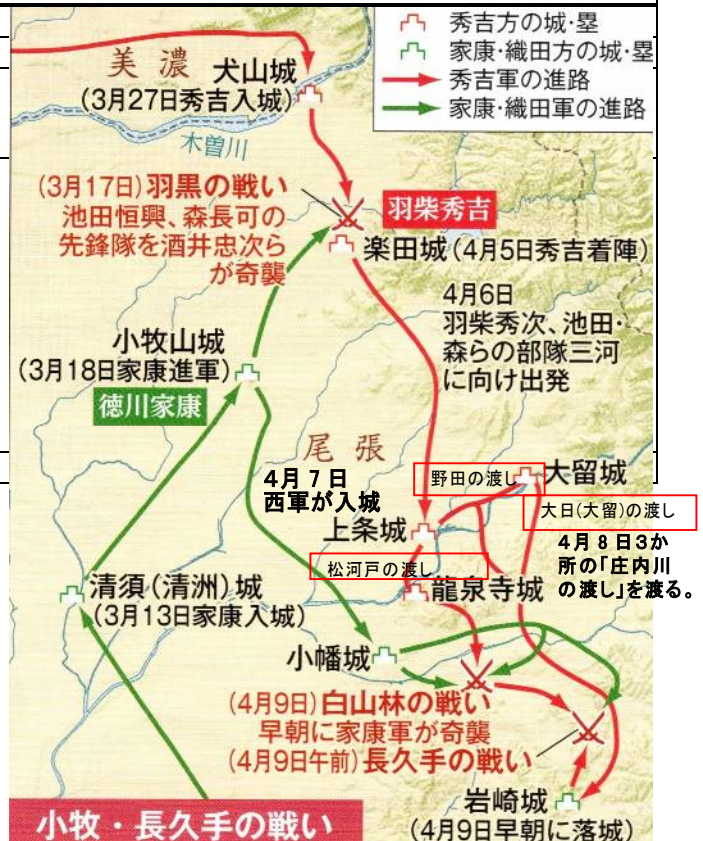
郷土史かすがい第34号(梅村光春氏)

## (3) 戦いの様子(時系列表) 天正12年(1584)

項目	月日	内容
背景		・信長の次男織田信雄は秀吉によって安土城を退去させられ、秀吉は信雄家臣の津川、岡田、浅井の三老臣を懐柔し傘下に組み込もうとした。
	3月3日	・信雄は秀吉と気脈を通じたとして三老臣を処刑した。これに激怒する秀吉は、信雄に対し出兵を決断した。(両軍とも北伊勢を戦場と想定していた) なお、上条城主の小坂孫九郎雄吉は、信雄の家臣であったので信雄の領地長島へ出陣した。
犬山城の占拠	3月13日	・織田信雄の居城清洲城に家康が1万5千の兵を率い到着した日、織田氏譜代の家臣で織田軍に与すると見られていた大垣城主池田恒興が突如、秀吉軍に寝返り犬山城を占拠した。 (※現在の犬山城は小牧・長久手の戦い終了後(1585)から小田原征伐(1590)のころ建造とされ、現存する最古の天守とされる)
	3月15日	・家康はこれに対抗するため北伊勢から北尾張へ軍を進めて小牧山城を占拠し本陣を置く。 ・一方北伊勢では秀吉軍への守りが不足して、信雄領の伊勢国の南半分がほぼ壊滅状態となる。
羽黒の戦い	3月17日	・秀吉方の森長可は兼(金)山城(可児市)を出て、16日羽黒(犬山市)着陣した。しかし、翌早朝、徳川軍松平家忠・酒井忠次の攻撃により後退し敗走した。森勢の死者300余人
小牧における対陣	3月18日	・敵襲の心配がなくなった家康は、小牧山城を占拠し、周囲に砦や土塁を築かせ羽柴軍に備えた。(家康は田楽砦を築いて、犬山城を取られた残兵に守らせた。田楽砦を突貫工事で築く時に、篠木・柏井の村人2千人が動員されたという。)
	3月21日	・秀吉は兵3万人を率いて大坂城を出発、25日に岐阜に進み、27日に犬山に着陣し、29日に楽田城に本陣を置く。信雄も長島から小牧城に陣を移した。 ・両軍が砦の修築や土塁の構築を行った為、双方共に手が出せなくなり挑発や小競り合いが続いた。
岡崎侵攻の計画	4月5日	・両軍は小牧付近にて対陣状態におちいっていたとき、池田恒興は秀吉のもとを訪れて「兵を三河に出して空虚を襲えば、徳川は小牧を守ることができなくなるであろう」と献策し、森長可とともに羽黒戦の恥を雪ぎたいと述べた。明6日秀吉はついにこれを許可した。
岡崎侵攻隊の進軍	4月6日 夜半	・西軍の一部2万は岡崎城を攻めるため4隊に分かれて、尾張東部の丘陵地帯を迂回し、大草、関田を経て柏井に向かった。 ・上条城主小坂孫九郎雄吉の留守を守る大留城主村瀬作左衛門ら篠木・柏井衆は思案にくれたが、結局西軍を受け入れることとなった。 (松河戸の代表も柏井の衆としてこの会議に参加していると思われる。)
	4月7日	・西軍は上条城に入る。上条城の周辺に、2泊宿営した。
西軍庄内川を渡る	4月8日	・案内役を村瀬作左衛門が引き受け、3箇所の「庄内川の渡し」を渡り、志段味から岡崎城へ向けて進軍する。 第一隊 - 池田恒興 - 兵 6,000人 大日、大留の渡し 第二隊 - 森長可 - 兵 3,000人 大日、大留の渡し 第三隊 - 堀秀政 - 兵 3,000人 野田の渡し 第四隊 - 羽柴秀次 - 兵 8,000人 松河戸の渡し
	4月8日	・2泊宿営した頃に近隣の農民や伊賀衆からの情報で羽柴秀次勢の動きを察知した家康は、攻撃せんと先発隊(水野忠重隊)は小牧山を夕方出発し「勝川の渡し」を渡り小幡城へ到着(20時)する。 (この時、西軍の動きを家康に報告したのは篠木・柏井衆だと言われています)
	4月8日	・家康と信雄の主力9,300人は、20時小牧山を出発し、如意、勝川を経て24時小幡城に着陣する。(家康が勝川の竜源寺(太清寺)で小休止し、勝川の渡しを渡るとき「この村はなんというか」と郷士の長谷川甚助に問いました。「庄内川は浅瀬になっており、みな徒歩むで川をわたるので「かち川」と呼んでいると答えると、家康は「なんとも縁起がいい名じゃな」「よし、これからは戦いに勝つという勝川と呼ぶがよからう」との話が残っています。) ・真夜中小幡城に到着(24時)して軍議をおこない、兵力を二分して攻撃することとし、9日未明2時、東軍支隊は羽柴秀次勢を攻撃せんと出発した。
岩崎城の戦い(岩崎城の落城)	4月9日	・9日未明、池田恒興勢が徳川側の丹羽氏重が守る岩崎城(日進市)の攻城戦を開始し落城させ約300人が全員討ち死にした。(ここで丹羽氏重が池田恒興の動きを止めていなかったら情勢は大きく変わっていたと思われる) ・この間、羽柴秀次、森長可、堀秀政の各部隊は、現在の尾張旭市、長久手市、日進市にまたがる地域で休息し進軍を待った。しかし、その頃すでに徳川軍は背後に迫っていた。
白山林の戦い(家康軍の急襲)	4月9日	・岩崎城で攻城戦が行われているころ、羽柴秀次勢は白山林(名古屋市守山区・尾張旭市)に休息していたが、早朝(4時半頃)、奇襲によって秀次勢は潰滅する。 多くの木下氏一族が、秀次の退路を確保するために討ち死にした。 ・案内役の大留城主の村瀬作左衛門も戦死した。



項目	月日	内容
桧ヶ根の戦い	4月9日	・秀次勢より前にいた堀秀政勢に秀次勢の敗報が届いたのは約2時間後のことであった、堀秀政勢は直ちに引き返し、秀次勢の敗残兵を組み込んで桧ヶ根に陣を敷き、迫り来る徳川軍を待ち構えた。 ・勢いに乗った徳川軍は、桧ヶ根(桧ヶ根、長久手市)辺りで堀勢を攻撃したが、返り討ちにされて逆に追撃された。秀吉軍の唯一の勝ち戦であった。
	4月9日	・東軍本隊は、9日2時に小幡城を出発して東へおおきく迂回し、4時30分ごろ権堂山付近を過ぎて色金山に着陣。そこで別働隊の戦勝と敗退を知り、岩作をとおり富士ヶ根へ前進して堀秀政勢と池田恒興・森長可勢との間を分断した。 この時、堀秀政は家康の馬印である金扇を望見し、戦況が有利ではないことを判断、池田と森の援軍要請を無視して後退した。
長久手の戦い	4月9日 午前10時頃	・岩崎城を占領した池田恒興、森長可に徳川軍本隊出現の報が伝わり、長久手の仏ヶ根北方に布陣。 4月9日午前10時ごろ、両軍が激突。戦況は一進一退の攻防が続いたが、森長可が狙撃されて討死して池田・森軍左翼が崩れ始めると、徳川軍優勢となった。 ・池田恒興も自勢の立て直しを図ろうとしたが、永井直勝の槍を受けて討死にした。合戦は徳川軍の勝利に終わり、家康は追撃したのち小幡城に引きあげた。 (東軍 9300人、西軍 9000人、東軍の死者は590人、西軍2500人、)
秀吉 龍泉寺城へ入る	4月9日	・秀吉は9日に小牧山へ攻撃をしかけている。午後に入って白山林の戦いの敗報が届き、秀吉は2万人の軍勢を率いて下津尾より庄内川を渡り戦場近くの竜泉寺城まで進軍したが、本多忠勝に行軍を妨害され長久手方面に向かうことができなかった。(その時、秀吉は柏井の坂井七郎座衛門屋敷に入っている。) 明朝小幡城を攻撃することとした。
秀吉 楽田城へ戻る。	4月10日	・家康と信雄が昨夜に小幡城を出て、上飯田付近より庄内川を越え小牧山城に帰還した報を聞き、秀吉は龍泉寺城に火を放し、庄内川を渡り楽田へ引き返すが、秀吉が庄内川を渡り上条から楽田に撤退するとき、篠木・柏井辺りで一揆が起こり秀吉方の軍勢は一揆に攻められるしんがりを務める堀尾勢に、篠木、柏井の兵が鉄砲で後追いをした。
北伊勢・美濃方面の戦い	4月29日	・秀吉は作戦の立て直しのため美濃に退く途中、清州城の西北にある加賀野井城を攻める(ここに小坂孫九郎雄吉も城を守っていた) ・奥城、竹ヶ鼻城を囲み、水攻めなどで順次攻略
	5月6日	加賀野井城は開城し、小坂孫九郎雄吉は逃げ延びる。
和解	11月12日	・その後、各地で戦いは続けられたが、秀吉、信雄の家康ぬきの単独和議が行われ、大義名分を失ってしまった家康は11月17日に三河に帰国する。こうして和解し、小牧・長久手の合戦は終了する。 ・上条城、吉田城は取り壊し、小坂孫九郎雄吉は前野村に屋敷を写し住むこととなる
その後	1586	・1月18日 天正大地震
	1588	・7月8日 刀狩
	1587	・九州出陣(島津氏征伐) 小坂孫九郎雄吉も織田信雄について出陣
	1590	・小田原出陣(北条市征伐) ・信雄の失敗をとがめ尾張・紀州の領地を没収 その後へ三好秀次が入る ・信雄は下野国(栃木)へ転封となり、小坂孫九郎雄吉の二男孫八郎は信雄のお供となつてついて行く ・小坂孫九郎雄吉の所領も3千貫文から380貫文に減らされる。
	1599	・小坂孫九郎雄吉没(76歳)



※ 天下取りのターニングポイント

4月7日に西軍は上条城に入り、上条城の周辺に2泊し、4月8日に庄内川の渡しを渡るこの間に、近隣の農民からの情報で、家康が秀吉方の動きを察知した事が、この戦いの勝敗を決したといわれている。

松河戸文化科学探求隊  
隊長 長谷川 浩  
080-3657-7052  
松河戸町の沿革ホームページ  
<http://matsukawado.com/>

**小牧・長久手の戦いメモ**